

## 生演奏の音を再発見した 2022 年

藤原 道夫

2020 年は春からコロナ禍が拡がり、以後殆どのコンサートがキャンセルされた。音楽を聴くには CD に頼らざるを得なくなる。コンサートは 2021 年秋頃から徐々に復活し、2022 年後半には以前の状態に近くなってきている。以下に 2022 年に聴いた演奏の中から特に印象に残った音について。

チェロ：9月に上野通明のチェロ・リサイタルを聴き、音に感動した。丸みを帯びて柔らかく、ふんわり拡散するような音だ。チェロを「弾いている」のではなく、大切そうに抱えている楽器から「音を引き出している」かのよう。ベートーヴェンの「チェロソナタ第3番」は素晴らしいとしか言いようがない演奏だった。これまでに世界的に活躍しているチェリストは大概聴いている。上野は誰とでも比肩できるように思う。

フルート：N響4月C定期公演でカラバノスによるモーツァルトの「フルート協奏曲第1番」を聴いた。美しいメロディが流れ、音を楽しむ。アンコールにドビュッシーの「パンの笛」が演奏され、その音に感激した。フワツとしたフルートの生演奏ならではの柔らかい音だ！ このような音は後日聴いた若手の演奏では出ずじまい。

ヴァイオリン：多くの日本人若手の演奏を聴いた中で、6月に郷古廉が出したのびのびとした音が印象に残った。11月にはムローヴァの演奏を聴いた。硬質な音に聴こえたが、アンコールで弾いたベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ「春」第2楽章は情緒たっぷり。

ピアノ：ピアノの演奏はあまり聴いていない。定期演奏会ではピアノ協奏曲がしばしばプログラムに組み込まれているので、自然に聴くことになる。N響2月C定期公演では、外国人ピアニストがブラームスの「ピアノ協奏曲第2番」を弾く予定だったがキャンセルとなり、小林愛実が急遽登場してシューマンの「ピアノ協奏曲」を弾いた。よい演奏だった。特に第2楽章の滑らかで粒だった気品のある音色は今でも耳に残っている。

生演奏から湧き出るよい音こそ心を動かす音楽の源泉だ、そんな当たり前のことを再発見した 2022 年だった。また、生演奏の音はオーディオ装置では再現しにくいこともはっきり分かった。